

【研究ノート】

読書する〈大衆〉  
一円本ブームにあらわれた「大衆」のイメージ

橋本 由起子\*

目 次

はじめに

1. 円本読者について

2. 送り手の「大衆」イメージ

3. 受け手の「大衆」イメージ

4. 「大衆」のイメージをめぐって

おわりに

キーワード 近代文学 円本 大衆文化 大衆 読者 都市 サラリーマン

はじめに

大正末期から昭和初期にかけては、発行部数100万部を超える大新聞が出現し、大衆雑誌『キング』の刊行やラジオ放送の開始など、いわゆる「大衆文化」が盛んになる【表1】。この時代、「大衆」という言葉は、流行り言葉のようにあらゆる場面で登場するが、はたしてそれはどのような人々だったのであろうか。

表1 大衆文化年表

西暦	和暦	事 象
1912	大 1	日本活動写真株式会社（日活）設立
1914	大 3	宝塚少女歌劇第1回公演
1918	大 7	『赤い鳥』創刊
1919	大 8	『改造』創刊
1922	大11	『サンデー毎日』『週刊朝日』創刊
1923	大12	『文藝春秋』創刊
1924	大13	『大阪毎日新聞』『大阪朝日新聞』100万部突破
1925	大14	東京放送局、ラジオ放送開始 『キング』創刊
1926	大15	改造社『現代日本文学全集』刊行
1927	昭 2	岩波文庫刊行

\*当館専門調査員

本稿では、「大衆文化」のひとつの事象である「円本ブーム」を取りあげる。円本とは、昭和の初頭に販売された一冊一円の予約廉価版全集・叢書類【表2】をいう。<sup>1)</sup>大量生産・大量販売・大宣伝からなる近代出版機構にのっとり、書籍の廉価販売を可能にした円本は、図書の大衆化をはかったといわれている。江戸東京博物館では、東京が出版の中心地であったことや、またその呼び名が当時東京市内を走っていた「円タク」に由来していることから、とくに東京における「大衆文化」を示す資料として、円本を度々展示してきた。

さて、この「円本ブーム」では、円本の享受者である読者が「大衆」と表現されていた。当時の新聞や雑誌をみると、出版者が「大衆」に購読を呼びかけている円本の宣伝広告【図1】が目立つ。そこで、本稿では円本読者が「大衆」と表現されることに着目し、そこから当時の「大衆文化」をささえた「大衆」がどのような人々であったのか考察を加えていく。

表2 主な円本

全集名	巻数	刊行年月	出版社	平均頁数	価 格	体 裁
現代日本文学全集	全63巻 (別巻含)	大15・12	改造社	622頁	並製 1円 特製 1円40銭	菊判 布製(並製初めは紙装) クロース装(特製)
世界文学全集	全57巻 (第2期含)	昭2・3	新潮社	526頁	1円	四六版 クロース装
明治大正文学全集	全60巻	昭2・6	春陽堂	532頁	並製 1円 特製 1円50銭	四六版 布装(並製) 布装背革(特製)
現代大衆文学全集	全60巻 (続巻含)	昭2・5	平凡社	1052頁	定価記載なし (1円)	四六版 布装
近代劇全集	全43巻	昭2・6	第一書房	647頁	1円	四六版 紙装
日本児童文庫	全76巻	昭2・5	アルス	251頁	2冊1円	四六版 紙装
小学生全集	全88巻	昭2・5	興文社	270頁	35銭	菊判 紙装

『日本近代文学大辞典』(講談社 1978年)より作成

『世界美術全集』 広告 (『東京朝日新聞』 1927年10月3日)

『現代大衆文学全集』 広告  
(『東京朝日新聞』 1927年4月1日)

## 1. 円本読者について

これまでの円本研究では、低廉な出版物の登場が社会経済や文化にもたらした功罪について論じたものが大半を占めている。そのうち、植田康夫「〈円本〉全集による読書革命の実態」<sup>3)</sup>、永嶺重敏「円本ブームと読者」<sup>4)</sup>・「モダン都市の〈読書階級〉—大正末・昭和初期東京のサラリーマン読者」<sup>5)</sup>が、円本読者を中心に論じているが、加えてとくに注目したいのが、前田愛の研究である。前田は著書『近代読者の成立』<sup>6)</sup>の昭和初頭の読者について論じた文章の中で、「円本ブーム」における読者の問題の重要性を説くのだが、それは円本読者の登場が「出版機構の自由に操作しうる《大衆》」の登場を意味していたからだと指摘している。つまり前田は、円本読者を出版者から量的な受け手としての役割を目された人々と捉えて、そのような人々を「大衆」と表現しているのである。この前田の円本読者＝「大衆」という表現は、本稿にとって重要なものである。確かに円本の宣伝広告には、徹底して「大衆」という言葉が並んでいるが、一体、この呼びかけはいつからはじまったものなのであろうか。

## 2. 送り手の「大衆」イメージ

大正15年（1926）10月18日の『東京朝日新聞』には、同年の12月に改造社から刊行された『現代日本文学全集』【図2】の全面広告【図3】が載っている。

善い本を安く読ませる！この標語の下に我社は出版界の大革命を断行し、特権階級の芸術を全民衆の前に解放した。一家に一部宛を！芸術なき人生は真に荒野の如くである。我中国人は世界に、特筆すべき偉大なる明治文学を有しながら、英国人のセキスピアに於けるが如く全民衆化せざるは何故だ。これ我社が我国に前例なき百万部計画の壮図を断行して全国各家の愛読を俟つ所以だ。

円本初の宣伝広告ともなったこの広告では、「大衆」ではなく「民衆」に購読が呼びかけられている。だが、『現代日本文学全集』の刊行の経緯を語った改造社社長の山本実彦の言葉をみると、ここで使っている「民衆」と「大衆」という言葉にはさしたる区別はなかったようである。山本によれば、そもそも円本誕生のきっかけは関東大震災での図書被害であったという。

当時大震災のため、東京の書籍は九割方焼けてしまつて居つた。横浜もその通りであつたらう。だから、読書子の書物に餓えて居ることは、創造もつかぬものであつた。書籍はこれが為めに高くなる、金をいくら出しても買ふことができぬ、わけて明治時代の文学本のごとき、一円のものが高くなるのが出でてくる始末であつた。これでは学問はすべて

読書する〈大衆〉  
 一円本ブームにあらわれた「大衆」のイメージ

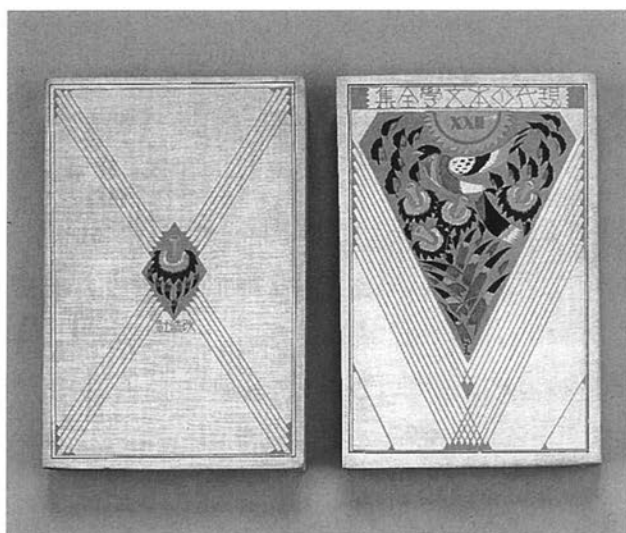


図2 『現代日本文学全集』（改造社 1926年）当館蔵

壹円

集募約豫

呈進本見容内

日冊月一十切締

る特の集全本  
色特大さへ

は、この全集が、現代日本文学の精華を、一冊に集めて、大衆に紹介するものである。その内容は、小説、散文、詩、評論、随筆、戯曲、など、現代日本文学のあらゆる分野を網羅している。また、その編纂は、文学界の権威者によるもので、その信頼性は、疑いなく、大衆の注目を集めることとなる。この全集は、大衆の読書生活に、大きな貢献をするものである。そのために、この全集は、一冊一冊、一円という、大衆に優しい価格で、出版される。大衆は、この全集を、ぜひとも、手に取り、読むべきである。

現代日本文学全集

第一編 小説	第二編 散文	第三編 詩	第四編 評論	第五編 随筆	第六編 戯曲
第一 芥川龍之介 羅生門	第一 宮田次郎 浮城物語	第一 島崎藤村 乱歩	第一 森田龍男 政治小説	第一 山田孝之助 小説	第一 宮田次郎 浮城物語
第二 芥川龍之介 羅生門	第二 宮田次郎 浮城物語	第二 島崎藤村 乱歩	第二 森田龍男 政治小説	第二 山田孝之助 小説	第二 宮田次郎 浮城物語
第三 芥川龍之介 羅生門	第三 宮田次郎 浮城物語	第三 島崎藤村 乱歩	第三 森田龍男 政治小説	第三 山田孝之助 小説	第三 宮田次郎 浮城物語
第四 芥川龍之介 羅生門	第四 宮田次郎 浮城物語	第四 島崎藤村 乱歩	第四 森田龍男 政治小説	第四 山田孝之助 小説	第四 宮田次郎 浮城物語
第五 芥川龍之介 羅生門	第五 宮田次郎 浮城物語	第五 島崎藤村 乱歩	第五 森田龍男 政治小説	第五 山田孝之助 小説	第五 宮田次郎 浮城物語
第六 芥川龍之介 羅生門	第六 宮田次郎 浮城物語	第六 島崎藤村 乱歩	第六 森田龍男 政治小説	第六 山田孝之助 小説	第六 宮田次郎 浮城物語
第七 芥川龍之介 羅生門	第七 宮田次郎 浮城物語	第七 島崎藤村 乱歩	第七 森田龍男 政治小説	第七 山田孝之助 小説	第七 宮田次郎 浮城物語
第八 芥川龍之介 羅生門	第八 宮田次郎 浮城物語	第八 島崎藤村 乱歩	第八 森田龍男 政治小説	第八 山田孝之助 小説	第八 宮田次郎 浮城物語
第九 芥川龍之介 羅生門	第九 宮田次郎 浮城物語	第九 島崎藤村 乱歩	第九 森田龍男 政治小説	第九 山田孝之助 小説	第九 宮田次郎 浮城物語
第十 芥川龍之介 羅生門	第十 宮田次郎 浮城物語	第十 島崎藤村 乱歩	第十 森田龍男 政治小説	第十 山田孝之助 小説	第十 宮田次郎 浮城物語

社造改

発行所

図3 『現代日本文学全集』広告  
 （『東京朝日新聞』1926年10月18日）

特権階級のものとなつてしまひさうだつた。私ども兄弟はこの点について幾回も話し合ひ、またいろいろとこれに対応する策を練つた。結局、「日本文学」を大集成することが刻下の急務であり、そしてその文学のうちでも明治以降のものをまとめることが、大衆の心にピツタリするものだと言ふ結論を得たのであつた。<sup>8)</sup>

大正12年(1923)9月1日に起つた関東大震災は、東京の図書をとりまく環境を一変させた。【表3】は、震災前後の市立図書館の蔵書数を示したものである。表中網掛けのしてある、深川、一橋、京橋、麴町、外神田、日本橋、両国、月島、台南、浅草、本所、中和の12館が全焼したほか、日比谷図書館も被害に遭っている。また建物には直接の被害がでなかった館でも、他館や閲覧者への貸し出し中の図書に焼失などの被害がでている。実に市立図書館20館の全蔵

表3 震災前後の市立図書館の蔵書数

図書館名	震災前図書数	焼失図書数	残留図書数	震災前図書数に対する焼失図書数の割合
深川	17,108	16,511	597	96.5%
一橋	13,052	12,389	663	94.9%
京橋	14,415	13,401	1,014	93.0%
麴町	3,064	2,505	559	81.8%
外神田	5,977	5,828	149	97.5%
日本橋	12,551	12,135	416	96.7%
両国	5,801	5,398	403	93.1%
月島	6,405	6,237	168	97.4%
台南	8,383	8,122	261	96.9%
浅草	7,848	7,116	732	90.7%
本所	6,231	6,060	171	97.3%
中和	5,229	4,943	286	94.5%
日比谷	77,228	2,658	74,570	3.4%
三田	6,105	17	6,088	0.3%
麻布	6,836	14	6,822	0.2%
氷川	6,368	58	6,310	0.9%
四谷	6,006	34	5,972	0.6%
牛込	3,956	64	3,892	1.6%
小石川	5,935	2	5,933	0.0%
本郷	5,820	13	5,807	0.2%
計	224,318	103,505	120,813	46.1%

\* 網掛けのしてある館は全焼した館を示す

『市立図書館と其事業 第18号』(1924年3月刊行)より作成



書224,318冊中103,505冊が、震災によって焼失したのである。この数は市立図書館全蔵書のほぼ半数にあたる。なお、東京帝国大学附属図書館でも75万冊、私立大橋図書館でも8万冊の全蔵書が火災で失われている。<sup>9)</sup>

円本誕生の経緯については、極度の経営難に追い込まれた改造社が、「起死回生の思いきった大バクチ、むしろヤケツパチともいうべき奇策」<sup>10)</sup>にでた結果であるというのが実状らしいが、山本によれば、震災のために益々貴重となった書籍が「特権階級」に独占されてしまうことを危惧し、「大衆」のためにつくったのが『現代日本文学全集』だったというのである。この「特権階級」に対するものとして出された「大衆」のイメージは、『東京日日新聞』で昭和2年(1927)4月5日から7日まで連載された「出版界は如何に推移するか」という記事で、さらにはっきりと捉えることができる。これは時代の寵児となった改造社社長・山本実彦、新潮社社長・佐藤義亮、平凡社社長・下中弥三郎ら円本出版社の各社長、その他出版界の重鎮からとったインタビュー記事である。その中の発言に次のようなものがある。

知識は大衆のものだ。全集の使命は、全国大衆の智的水準を向上せしめるにある。知識慾に飢え、しかも余りに高価なる書籍であるがゆゑに、機会に恵まれざる一般大衆の中に展開して、廉価に、容易に、而も体系的に、知識の洪水を浴びせかけてやる点にある。高価な書物を買ふ財的余裕があり買った書物を読まずに堆積しておく書齋がある一部狭小な読者層から全国大衆にまで展開してゆくところに円本存在の本質がある。一切が社会的となり、大衆的となりつゝある現状において、大衆の渴望に応へんとして出た廉価全集物に、どうして必然性が無いと云へよう！円本に対する中傷攻撃が一時の流行であつても、円本そのものは流行ではないのだ。(中略)それは勿論広汎なる大衆を対象として、決して書齋裡のいはゆる識者なるものを念頭においてゐない。無視だ。否、むしろ挑戦だ。

ここで言われている本を所有できる「識者」と、所有できない「大衆」という対立の構図を、出版者は一貫して主張していた。宣伝広告では、「識者」に対する反発を煽る調子で語りかけ、円本の本文を総フリ仮名にすることをとくに強調するなど、出版者は大いに「大衆」を意識した販売行動にでた。それは一冊でも多くの本を売りたい出版者が、新しい読者を獲得するためにとった方法であった。つまり、送り手は「大衆」という知識欲に飢えた階層のシンボルをかがけて、これまで本を買うことのできなかった人々を惹きつけようとしたのである。それでは、この送り手がつくりだした「大衆」のイメージに反応し、実際に円本を購入した人々とはどのような人々だったのであろうか。

### 3. 受け手の「大衆」イメージ

改造社『現代日本文学全集』は、第一回配本で23万部の予約を取り付けた。当時の出版物は、初版で2千部から3千部でれば記録的なことだったから、この数は真に驚くべきものであった。昭和2年（1927）11月22日の『東京朝日新聞』に掲載された『現代日本文学全集』の広告には、その23万の予約を申し込む人々の活況を描写した宣伝文が載っている。

怒涛の如き大衆の声援は遂に我社の壮図を完成せしめんとす。刻々迫る締切前の殺気に満てる街頭の白熱戦を見よ。血と汗との一円を気前よく投ずる貧しき人々の涙ぐましい姿！日用品を節してもと擲つ婦人たちの厳粛ないぢらしい其姿！（中略）刻々迫る！本全集の締切。各人一部づつ！この計画の成功を一に大衆各位の白熱的声援に期待します。

宣伝文には劇的な情景が描かれているが、はたしてここに書かれているような状況が現実展開していたのであろうか。実際、円本の宣伝方法は「円本合戦」と呼ばれる派手なもので、ビラの撒布や、宣伝カーの出動、作家による移動講演会など、あらゆる方法が試みられた【図4】。

図4 改造社『現代日本文学全集』の宣伝隊 1927年  
（『雑誌「改造」の四十年』光和堂 1977年刊）

新聞の紙面広告も、全面広告、見開き全面広告と、時を追って拡大し、文句も雄弁であった。もちろん、宣伝文は販売効果をあげるためのものであるから、事実を文面通りには受け取り難い。だが、関東大震災後に流行した東京案内本にも「少なくとも、書棚が都市生活に欠き得ない一つの家庭装飾となった現代に、幸ひにも廉価な円本、半円本が、どんな貧弱な家庭にも、その役目を果たしてゐる。これも、ほゞ<sup>11)</sup>ぬましい近代的東京風景の一面である」と、東京では円本が広く市民に行き渡っていたかのような記述もあるが、はたして実体はどうだったのであろうか。

東京で円本が読まれている様子は、昭和4年（1929）に刊行された今和次郎の『新版大東京案内<sup>12)</sup>』の「省線によつて運ばれる俸給生活者群」の章にある。それは通勤電車で円本を読むサ



読書する〈大衆〉  
—円本ブームにあらわれた「大衆」のイメージ—

ラリーマンの描写である。

郊外居住者は一どきに出勤時間際に電車の箱へ突進する。そして多くは空手だが、新聞だけは電車内で読むのを日課とする者あり、或は円本の類に読みふける。

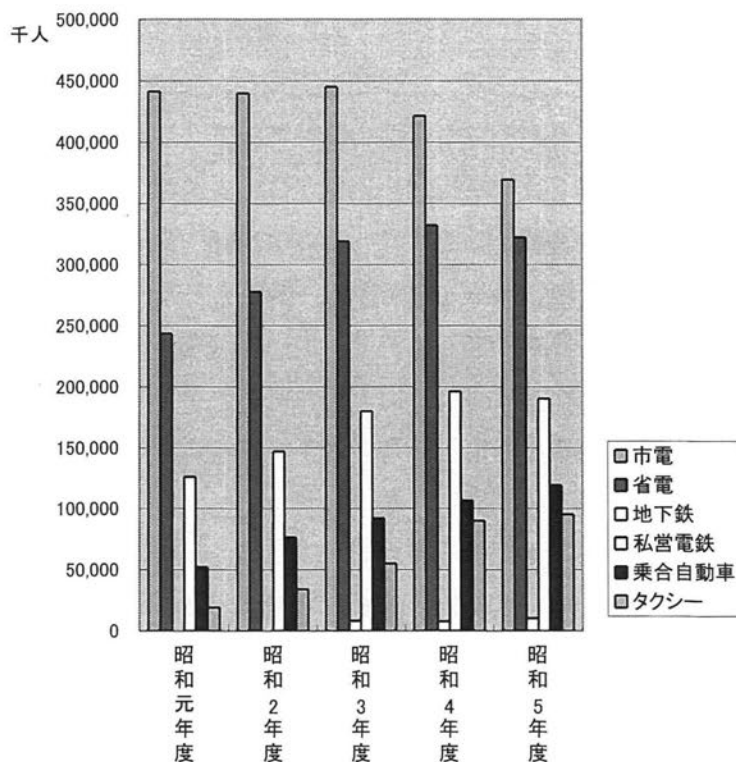
ここで記事にされている通勤の長距離化、それにともなうラッシュ・アワーという現象が起るようになったのも、先述の関東大震災が大きく影響している。震災後、東京の居住者の分布は郊外へと広がっていった。【表4】は、震災前と震災後の東京市内（旧市域）と郊外（新市域）の人口を示したものである。震災前の大正9年（1920）では郊外に対して圧倒的に勝っていた市内の人口が、大正12年（1923）の震災をはさんで、逆転している。あわせて【表5】の東京市種別交通量を見てみると、

表4 大東京新旧市域別人口表

年 次		大正9年	大正14年	昭和5年
実数（人）	旧市域	2,173,201	1,995,567	2,070,913
	新市域	1,177,429	2,004,263	2,899,926
	合 計	3,350,630	3,999,830	4,970,839
割合（％）	旧市域	64.9	49.9	41.7
	新市域	35.1	50.1	58.3
	合 計	100	100	100

『公営交通事業沿革史〈戦前編〉①東京市（二）電気局三〇年史（昭和15）』（クレス出版 1990年）より作成

表5 東京市種別交通量年計グラフ



『公営交通事業沿革史〈戦前編〉①東京市（二）電気局三〇年史（昭和15）』（クレス出版 1990年）より作成

市内を走る市電の利用者が減少していくのに反比例して、市内と市外とを結ぶ省線と私営電鉄の利用者が増えている。郊外の自宅から市内の職場に通うサラリーマンが、長い通勤時間を読書をして楽しむようになったのはこの頃からである。その様子は、新聞記事でも伝えられている。

- ① 近頃流行の大量生産による（廉価）一円の予約出版物が如何に多くの読者を待つて居るか云ふことは、朝な夕な東京駅に吞吐されつゝある幾万のサラリーマンの小脇に、往々その所謂一円全集なるものが抱へられてゐるのを見ても、略推察することが出来るであらう。（『読売新聞』昭和2年4月6日）

- ② 此頃全集物類が車内で盛んに読まれるためかこれが遺失もなかゝゝ多く見うけられます。（『読売新聞』昭和3年1月20日）

このように交通機関などでの移動中に本を読むことが定着してくると、本のカバー<sup>13)</sup>が登場する。この本のカバーについては、読んでいる本を他人に知られないためにという本来の用途だけでなく、また別の価値もあったようである。それは次の記事から読みとれる。

吾々には円本は全く不必要で手にすら取つたことがない。あのがさゝした低脳児を列べた様な格好をして、汽車や電車でモボやモガの類ひが是れ見よがしのブツクカバーを見せつけられると頭痛がして来る全く罪な連中である。（『東京新誌』2巻2号 昭和3年3月）<sup>14)</sup>

この記事では、モボ・モガが円本をお洒落な小道具として、これみよがしに携帯した様子が書かれているが、円本を持ち歩くことは時代を先駆ける一つの流行現象ともなっていたのである。それもそのはずで、円本の装幀を手がけていたのは当時一流のグラフィック・デザイナーたちだったのである。例えば『現代日本文学全集』の装幀をした杉浦非水は、三越やカルピスなどの広告デザインで知られ、日本にアール・ヌーボー様式を導入した人物である。また他の全集でも、山名文夫や恩地孝四郎といった時代を代表するデザイナーが装幀を担当していた。このように、円本には流行に敏感な都市生活者を惹きつける意匠が凝らされていたのである。

さて、ここまでにあげた円本の読者例は、都市のサラリーマンやモボやモガなど、どちらかというと従来読者層に属する人々によるものであったが、他方、送り手が呼びかけた「大衆」読者の読書状況はどうだったのであろうか。円本の享受者層については、過去の研究では円本読者に階層間のひろがりがあったことは認めつつも、ブームの底は浅かったことが指摘されている。<sup>15)</sup>

読書する〈大衆〉  
—円本ブームにあらわれた「大衆」のイメージ—

そこで、円本の登場した大正15年（1926）から昭和2年（1927）にかけての東京市の家計調査【表6】から、このことを考えてみたい。この調査対象は月収200円未満の給料生活者世帯と労働者世帯の計393世帯である。これによると、給料生活者世帯の平均月収は149.21円、労働者世帯は122.03円で、そのうち「修養娯楽費」<sup>16)</sup>は、給料生活者世帯が7.98円で収入の5.8%を、労働者世帯が5.09円で4.6%を占めている。当然ながら、収入のよい給料生活者世帯のほうが、労働者世帯よりも収入に占める「修養娯楽費」の割合が高い。さらに「修養娯楽費」の内容を細かく見ると、「新聞・雑誌・図書費」は、給料生活者世帯で2.47円（1.8%）、労働者世帯で1.11円（1.0%）となっているが、この額では費用のすべてを円本に投入したとしても、給料生活者

表6 東京市家計調査統計原表 自大正15年9月1日至昭和2年8月31日

		給料生活者		労働者	
世帯数		129		264	
世帯人員		4.2		4.4	
		実数（円）	比率	実数（円）	比率
平均月収		149.21	100.0%	122.03	100.0%
平均支出		136.61	100.0%	111.76	100.0%
	飲食物費	34.72	25.4%	33.59	30.1%
	住居費	29.29	21.4%	24.02	21.5%
	被服費	20.09	14.7%	14.03	12.6%
	公課費	1.75	1.3%	1.25	1.1%
	保険衛生費	9.63	7.0%	7.64	6.8%
	教養費	5.54	4.1%	5.14	4.6%
	交通費	3.69	2.7%	2.10	1.9%
	交際費	12.33	9.0%	9.23	8.3%
	嗜好品費	9.00	6.6%	7.91	7.1%
	修養娯楽費	7.98	5.8%	5.09	4.6%
	・新聞、雑誌、図書費	(2.47)	(1.8%)	(1.11)	(1.0%)
	・娯楽費	(2.36)	(1.7%)	(1.65)	(1.5%)
	庸人料	0.24	0.2%	0.36	0.3%
	雑費	1.60	1.2%	0.82	0.7%
	使途不明	0.75	0.5%	0.58	0.5%

\*（ ）は修養娯楽費の内数  
『東京市家計調査統計原表 自大正十五年九月一日至昭和二年八月三十一日』  
（東京市役所 1928年3月31日）より作成

で二種、労働者で一種の円本を買うことがやっとで、誰もが円本を買い求めていたというようなことは現実的には考え難い。<sup>17)</sup>この資料からは、主な円本読者は給料生活者と一部の上層労働者であり、購読者層は漠然と信じられているよりは薄いものだったと考えられる。

しかし、送り手のイメージする「大衆」読者にまったく円本が読まれていなかったというわけではない。労働者層での円本の購読状況を知る資料としては、前田愛が『近代読者の成立』で引用した多田野一「工場労働者の読書傾向」<sup>18)</sup>がある。この調査は、昭和3年(1928)にある印刷関係の職工男女100人を対象にして行われた読者調査で、円本は全体の6割強という高い購読率を誇っている。また、数件の新聞記事や「月報」【図5】に寄せられた投稿からも、「大衆」読者の存在が確認できる。「月報」とは、配本に際して全集に挟み込まれてくる付録の小冊子のことで、収録作家や作品の紹介、文壇の消息、エッセイなどがのっている。今では定着した感のある「月報」も、もとをただせば改造社『現代日本文学全集』に付けられたのがはじまりであった。ところでこの「月報」には「読者の声」という投稿欄がある。この欄は、『改造社文学月報 第2号』(昭和2年2月15日発行)に寄せられた読者の要望に応じてつくられたものであったが、この欄に紹介された読者の素性こそ、まさに送り手のイメージする「大衆」読者に近いものであった。



図5 『改造社 文学月報』当館蔵

- ① 海山三百里を隔てて朝夕田圃に稼ぐ我々貧しい姉妹にとって、秋の夜の慰安を与えて下さるものは都よりおとづれる御全集です。偉容、紙質、印刷、もう殆んど申分がありません。水車の横の茅屋根の中にも堂々たる図書館が出来ました。お喜び下さい。(『改造社文学月報 第11号』 昭和2年11月5日発行)
- ② あゝわが『現代日本文学全集』よ、其日の糧に喘いで、一円の支出にも血を絞るばかりの苦なるに尚汝と相離るゝ能はざる我等幾多の可憐児の居るを忘るゝ勿れ。(『改造社文学月報 第13号』 昭和3年1月1日発行)
- ③ 私は雪に埋つた納屋に藁仕事をしてゐる少年でございます。私は『現代日本文学全集』の来るのばかりを待つてゐます。(『改造社文学月報 第15号』 昭和3年3月1日発行)

これらの投稿からは、読者の生活の厳しさが伝わってくる。宣伝広告に言っていた「血と汗との一元を気前よく投ずる貧しき人々の涙ぐましい姿」「日用品を節してもと擲つ婦人たちの厳粛ないぢらしい其姿」の「大衆」の具現ともいえる。確かに過去の研究からも層の薄さが指摘される円本読者だが、やはり今まで本を所有できなかった人が消費者として意識され、書籍の読者層に参入し得るようになった意義は大きかったのである。それは既存の読者層として優越感を持っていた「識者」たちにとっても、看過できない問題であった。

#### 4. 「大衆」のイメージをめぐる

記事を執筆する「識者」たちは、「円本ブーム」をまず「出版資本主義の確立」として捉えた。昭和2年（1927）6月の『中央公論』の特集「出版戦国時代の出現」では、高島素之、青野季吉、広津和郎、野口米次郎ら4名の寄稿者のうち3名までがそうこたえている。<sup>19)</sup> というのも、円本の成功はそれまでの出版物の印刷限度部数を変え、それまで無自覚だった作家達に印税について考えるきっかけを与えたからである。作家の広津和郎は、『改造社文学月報 第6号』（昭和2年6月5日発行）に「足音の高い大人」というタイトルで次のような文章を寄せている。

今まで出版といふものは、全社会からみれば、知識階級相手の狭い範囲のものだった。そして経済的に云つても、日本の他の生産事業に比して、ほんの小さな赤子に過ぎなかつた。ところが、それが最近に至つて、急に一般民衆相手の足音の高い大人に成長したのだ。

広津和郎は、「円本ブーム」がもたらした出版産業の拡大と享受者層の広がりを積極的に評価しているが、ブームの最中でのこのような好意的な意見は少数であり、円本に対する「識者」の見方は、むしろ批判的なものに傾いていた。<sup>20)</sup> 例えば宮武外骨は『一円本流行の害毒と其裏面談』<sup>21)</sup> という本をあらわし、円本出版の弊害を「図書尊重の念を薄からしむ、印税成金の墮落、批評不公正の悪習を促せし罪、国産洋紙の浪費」など十六ヶ条にまとめている。宮武が言うように、たしかに廉価な円本の登場は他の単行本や雑誌の消費を鈍らせることになった。昭和3年（1928）4月27日の『東京朝日新聞』の記事「円本に押された雑誌」では、昭和2年の雑誌発行部数が「円本ブーム」のせいで、前年度に比べ、著しく減少したことを報じている。またその影響は単行本の発行にも等しく、昭和元年（1926）に20,213種類出されていた単行本が、昭和2年末には、19,967種と、246種類も減少している。減少したものでは雑誌、単行本ともに、とくに文学や文芸ものの減りが著しく、これも「円本に押されたためであらう」とのコメントが付されている。他の出版物を出せない状態にしたことから、損害をこうむった「識者」も多く、円本に対する攻撃が激しくなるのも当然のことであった。まずその矛先は、抜き買いを許さない円本の販売方法に集中し、やがてはこの出版者に有利な販売方法を安易に受け入れる読

者に非難の目が向けられていった。昭和2年5月31日の『東京朝日新聞』の社説には、「文学の実業化」と題して次のような記事が載っている。

他のあらゆる生活活動においては、ほとんど奔放とも評し得る自由趣味をもつて、銘々の分担区域を選定し、また時としては手を空しくして前途に期待する人々が、ひとり読書の一方面ばかりに、かくの如く雷同付和し、甘んじて何人の利益にも帰せざる拘束を受けようとすることは、乗ずべくかつ説明すべからざる当世の一弱点と認められる。

同様の記事が、同紙昭和2年4月23日の「書籍の大量生産」、同年9月23日の「読書の自由」などの題で見られるが、なかには円本読者の質を疑う攻撃的な記事もあった。

#### ①「文学の実業化」

米は必ず食ひ反物は必ず着るけれども、本は必ずしも読まず、読んでも身の養ひにならぬ場合がある。（『東京朝日新聞』昭和2年5月31日）

#### ②「山本改造社長に与へて昭和二年の出版界を論ずる書」

遺憾ながら、我国今日の読書階級は、そこまで発達してゐないといはねばなりません。それは単に経済的の関係のみではないのであります。頭脳の問題であり、インテリゲンチヤの数の問題であります。（『週刊朝日』昭和2年12月25日）

これらの記事では、円本読者を未熟な読者として侮蔑した表現<sup>22)</sup>がみられるが、そこにあるのは、あくまで自分たちと「大衆」読者とを差別化したい「識者」たちの頑なな態度である。②の記事でいえば、円本が登場するまで、本は「知識階級」を証明する記号であった。つまり、それまで「読書階級」といえばそのまま「知識階級」を意味していたのである。しかし、3章で分析したように、数としては少ないまでも、円本が「経済的」には「大衆」が本を所有する可能性をつくったので、その記号は絶対的な意味をなくしつつあった。そこで苦しくも「識者」は、「頭脳」や「インテリゲンチヤの数」を問題にして最後の守勢にまわったのである。この記事は、もはや「読書階級」=「知識階級」という構図が失われたことを示す記事でもあったのである。

さて、このように社会的にも注目されるようになった円本読者だが、その性質については、同時代評でも後の研究でも、無意識にブームに乗せられていく受動的な人々と見られるにとどまっている。だが、その見方は一方的に断じられたもので、円本読者自身が「円本ブーム」をどのようにとらえていたのかという視点を欠いている。そこで、当時の新聞や雑誌から円本読者の声を拾ってみたところ、もっと積極的な読者像が浮かびあがってきた。

個人が意見を広く発表できる場として、新聞や雑誌の投書欄がある。『東京朝日新聞』の「鉄



箒」という投書欄でも、度々円本が話題にのぼっていた。そのなかのひとつに昭和2年12月7日に掲載された「全集の増巻」という投書がある。

当初に一定の計画を発表して置いた全集本を、後に至つて読者に無断でこれを変更する如きは、非難すべき行為ではなからうか。読者ははじめに内容見本によりその内容を知り、自己の負担能力を考慮して後購読を申込むのである。これを勝手気まゝに変更するとはまづ何故の内容見本なるかを問はねばならない。これでは始めづさんな計画を立て、見ばえのよい内容を盛つて置いて、申込締切後どんゝゝ内容を変へ、予期せられない負担を増加させ得ることになるではないか。「よりよき全集へ」とか「万人の要求」とか自分に都合のよい美辞麗句をならべ立てゝも、他の競争図書出現による読者の減少を救はんとする計画であると断ぜられても、一言の弁解も出来まい。さらでだに読者は全集の負担に苦しんでゐるのである。同時に良書の出版もいはゆる円本洪水のため著しく妨害されてゐるのである。

この投書は、予約販売制をとる円本に起りがちだった勝手な内容変更を批判したものである。それは、内容見本【図6】でうたっていた内容が、出版者の都合如何で、巻数を増やす、配本の時期や順序を変えるなどの不履行が横行したためであるが、「これと同一の苦情を述べられた投書が、既に何通も来て居るのでこれを一部の意見を代表するものとしてこの欄の議題に供したいと思ふのである」という「係り記者」からの呼びかけで、後に同欄で展開される円本論議の発端となった。反響はまずまずで、円本出版社のひとつであった平凡社の社長からの弁明まで寄せられ、紙面上での意見交換が数回にわたっておこなわれた。そのなかには次のような投稿もあった。

#### ①「円本増刊も可」

発行所としてはそんな変更は動機の何であるかを問はず、前もつて読者の意向を尋ねるのが至当かと思ふ。毎月の配本に一枚の葉書をはさむくらゐは何でもあるまい。（『東京朝日新聞』昭和2年12月10日）

#### ②「円本局外観」

円本の予約者も、ある大事業に参加共同してゐるのだといふ感じをもつて、少しは経営者を支持するやうに

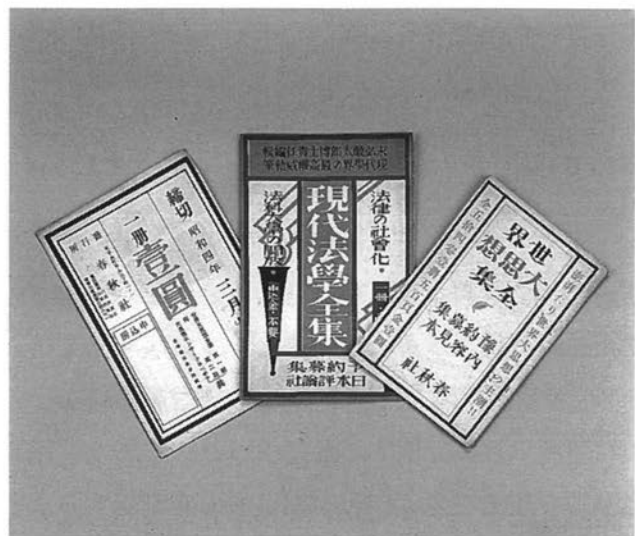


図6 内容見本  
当館蔵 91212441 91970011 91970002

努めなければなるまい。(中略)本は一冊毎に読もうか読むまいかを決定すべきものである。

(中略) いはんや色々のすき嫌ひな書物を、一括してゝなければ売らない買ふまいといふのだから、読むための予約ではなく、最初からそろへて楽しむための予約であつたことがわかる。(中略) そこがまたこの事業の確固たる根底であつたことも考へなければならぬ。

(『東京朝日新聞』昭和2年12月16日)

①は、内容変更に際しては読者の意見を聞くように求め、送り手の勝手に任せるのではなく、逆に送り手を自分達のほうに向けさせようとする積極的な意見である。また②は、まさに宣伝広告でうたわれていたように、「円本ブーム」を自分達の運動<sup>23)</sup>としてとらえたうえで、さらに円本の販売システムに隠された送り手の意図さえも鋭く見抜いている。この円本についての議論は、②の投書が載った日に、係り記者から「この問題は一旦打切ります。いやなら止せといった態度を非難した投稿と、増刊は大抵結構だといふ投稿が、尚数通来て居ます」という言葉で一方的に打ち止めされてしまったが、一連の投書からは、人々の「円本ブーム」に対する強い関心とともに、ただブームに翻弄される受動的な立場にとどまるのではなく、自らの意見を発信する積極性がみえる。

このような積極的な読者は、先述の『改造社文学月報』の「読者の声」でも確認でき、会員としての誇りを語った投書や、また「当地の『現代日本文学全集』会員を以て睦会を組織しました。毎月一回第四日曜を集会日として、全集に対する会員相互の意見発表及び感想の交換等に一夜を楽しく過してゐます」(『改造社文学月報 第15号』 昭和3年3月1日発行)と、自発的に同好組織を結成したとの報告が寄せられたりしている。これらの投稿からは、出版者の手を離れ、読者が自発的に「円本ブーム」を盛り立てていく様が見られる。それは、円本読者が、送り手のイメージを超え、発信力をもった新たな「読書階級」を形成していったことを意味していたのである。

## おわりに

「円本ブーム」にあらわれた「大衆」という言葉について、これまで考察を重ねてきたが、結論として次のような事が言える。まず、円本ブームにおいて「大衆」とは、送り手が消費の拡大をねらい、本を所有できなかった層を当て込んでつくったイメージだったということ。しかし、実際の円本読者は、既存の読者層の方をより多く惹きつけ、結果として、読者階級といわれる層の厚みを増すことになった。つまり「円本ブーム」にいう「大衆化」とは、このように階層を超えて多くの人が同じものを享受するようになったということである。そして、こうして形成された新しい読者層の「円本読者」は、受動的にブームに流されるのではなく、積極的に意見や要望を発信する新たな力をもったまとまりとなつていった。それは、送り手のイメー

ジを超えたまとまりであり、現在使われる「大衆」—「多くの人、民衆」という概念により近いものである。<sup>24)</sup>

円本の登場した昭和の初頭は不況下にあり、東京市内に「知識階級職業紹介所」<sup>25)</sup>ができるなど、それまで富める階級とされていた人々の生活にも陰りが出てきた頃である。木佐木勝は、『木佐木日記』の大正15年(1926)12月1日の日記で、『現代日本文学全集』の予約申込者の行列の中で、三、四十歳の中堅サラリーマン風の人が一番多く、二十代の青年サラリーマンらしい者は少なかった」と証言し、その理由を「失業していない中堅サラリーマンのあがない得るものは、せいぜい円文化で、彼らのふところがいかに貧しいかという事実が、改造社の『現代日本文学全集』を成功させた最大の理由となりそうだ」<sup>26)</sup>と述べている。円という値段は、本を所有してこなかった人々には自分でも本が買えるという希望を与え、既存の読者には「ふところ」の「貧しさ」からくる娯楽の制約がなんとか許される値段だったのである。「円本ブーム」という現象を通じて、時代の表舞台に立っていく「一般の人々」の力の伸長をみることになったが、「大衆文化」も、そのような新しい時代を築こうとする人々に受け入れられ、嗜好された文化であった。

※本稿で引用した資料は、旧漢字を新漢字に改めた。

#### 【註】

- 1) 後に一冊一円をわる価格の全集・叢書類も出版されるが、そのようなものも含めて円本という。
- 2) 主な研究には、瀬沼茂樹『本の百年史 ペストセラーの今昔』(出版ニュース社 1965年)、鈴木敏夫『出版—好不況下興亡の一世紀』(出版ニュース社 1970年)、山本芳明「円本ブームを解説する」(『日本文学』48号 1999年)などがある。
- 3) 植田康夫「〈円本〉全集による読書革命の実態」(『出版研究』14号 1984年)
- 4) 永嶺重敏「円本ブームと読者」(『近代日本文化論 7』 岩波書店 1999年)
- 5) 永嶺重敏「モダン都市の〈読書階級〉—大正末・昭和初期東京のサラリーマン読者」(『出版研究』30号 2000年)
- 6) 前田愛『近代読者の成立』(有精堂 1973年)
- 7) 同書、「円本が投げかけた問題の核心は、(中略)出版の資本主義もさることながら、その結果として顕在化した膨大な享受者層そのものの中にあった」、208頁。
- 8) 山本実彦「円本時代」(『書物展望』 1935年)
- 9) 凶書の損失を補う産業界の被害も大きく、印刷業界では、東京印刷同業組合員658工場のうち、552工場が罹災、14工場が倒壊し、生産能力の83パーセントが壊滅した。横浜では全業者が焼失している。(『東京の印刷組合百年史』東京都印刷工業組合 1991年)、193頁。
- 10) 鈴木敏夫『出版—好不況下興亡の一世紀』(出版ニュース社 1970年)、189頁。
- 11) 『日本地理大系 第三巻 大東京編』(改造社 1930年)、250頁。
- 12) 今和次郎『新版大東京案内』(中央公論社 1929年)、270頁
- 13) 本のカバーの宣伝広告は、『改造社文学月報 第8号』(1927年8月5日発行)に掲載されたのが初出だが、そこには「現代日本文学全集を始め他の予約全集本購読者必携／汽車電車中の読書に都合よし(如何なる本を読めるか他人に知られざるを以て)」とある。

- 14) 『東京新誌』2巻2号(1928年3月)。但し、『書誌書目シリーズ24 東京新誌 第2巻』(ゆまに書房 1987年)より引用。
- 15) 永嶺重敏(前掲)の研究や、有山輝雄「一九二、三〇年代のメディア普及状態—給料生活者、労働者を中心に」(『出版研究』15号 1984年)に詳しい。
- 16) 修養娯楽費は宗教費、図書新聞雑誌費、娯楽費、旅行費からなる。
- 17) 有山の研究では、ここから書籍に先駆けかなりの割合で普及をしていた新聞の値段一円を引くと、給料生活者には1.47円残るが、労働者には0.11円しか残らず、破格の安さをうたった円本であってもその購入は難しいとしている。34—35頁。
- 18) 多田野一「工場労働者の読書傾向」(『新文化』1928年)。但し、前田愛『近代読者の成立』(前掲)より引用、210頁。
- 19) 前田愛『近代読者の成立』(前掲)で指摘されている。207頁。
- 20) 中央公論社の編集者であった木佐木勝の『木佐木日記』(現代史研究会 1975年)は、当時の出版界の事情に通じた価値ある資料だが、昭和3年2月9日の日記で「円本に対する当時の識者の評価は概して否定的できびしいものであった」と述べている。
- 21) 宮武外骨『一円本流行の害毒と其裏面談』(有限社 1928年)
- 22) 永嶺重敏「円本ブームと読者」(前掲)でも、このような「識者」の反発を「ある意味で文化の標準化・大衆化に対する知識人側の危機感の表現として捉えることも可能である」と位置づけている。192頁。
- 23) 宣伝広告には「円本ブーム」が労働者の文化運動であるというような文章がのった。「私達は唯だ単に一読者と出版者—のつながりばかりでなく日本文化のためにお互に手をとって進まねばならぬ身です。今後親しく膝を交へて祖国芸術を打語らふ一夜もあらうことを信じます」(山本実彦『現代日本文学全集』第一次会員諸君へ)(『改造社文学月報 第6号』1927年6月5日発行)「開闢以来文化史上に特筆さるべき本全集の読者として加盟さることは実に諸賢が文化史上に重要な一員であることをも裏書するものである。時は今—、直ちに諸賢の態度を決定して下さい」(『現代日本文学全集』宣伝広告(『東京朝日新聞』1926年11月30日))
- 24) 木谷喜美枝「円本ブームと文学者」(『講座昭和文学史 1 都市と記号』有精堂 1988年)では、出版者のいっている「大衆のために」とは、「プロレタリアート」や「民衆」「大衆小説読者」など特定の人々を指すのではなく、広く「一般読者」という意味であるとし、逆に「大衆」という概念の形成に円本がある役割を果たしたと見ている(35頁)。ところで、『現代日本文学全集』に後続した平凡社の『現代大衆文学全集』(1927年5月配本開始)は、より多くの読者をもとめて、まさに読者とたのむ「大衆」を書名に冠した全集だったが、実はこの全集の登場が「大衆文学」という呼称を定着させていくことになったという。木谷の研究では、文学全集5種をとりあげ、収録作家の傾向から各全集のオリジナリティーを分析しているが、「大衆」の問題についてもこのような各全集の内容の分析が必要であり、今後の研究の課題である。
- 25) 1927年5月7日の『東京朝日新聞』には「現在知識階級の失業者で非常な苦境にある者が東京市内に一万人を突破してゐる事は確かで、そのうち卒業して二三年位までの学校出の失業者が約七千人、不景気のため整理されてまだ活動能力の十分な中年者の腰弁当が三千人位の割合になつてゐる」との記事がある。
- 26) 木佐木勝『木佐木日記』(前掲)、165頁。